IoT Edge ワークショップ

Global Blackbelt Sales Microsoft Corporation

Sept-2018

Table of Contents

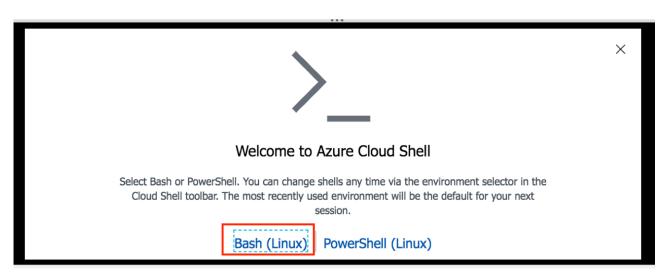
演習: Cloud Shell (Bash)の設定	1
タスク1: Cloud Shellの初期設定	1
演習: Azure IoT Edge デバイスの作成	2
タスク1:Linux VMのデプロイ	2
タスク2:コンテナランタイムのインストール	5
タスク3:IoT Edgeデバイスの追加	7
タスク4: IoT Edgeランタイムのインストール	8
タスク5:IoT Edgeデバイスにシミュレーションモジュールを追加	. 10

演習: Cloud Shell (Bash)の設定

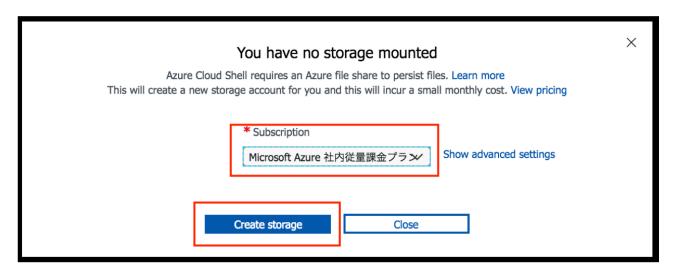
Cloud Shell (Bash) 環境を設定します。

タスク1: Cloud Shellの初期設定

- 1. [>_] ボタンをクリックしてCloud Shellを開始します。
- 2. Azureポータル画面下部のダイアログで [Bash(Linux)] を選択します。



3. Cloud Shell用のストレージアカウントに利用するサブスクリプションを選択し[Create storage]ボタンをクリックします。



4. ストレージの作成が完了し、Bashが起動されることを確認します。

5. VMにSSHでログインする場合は、接続文字列を入力してログインします。

演習: Azure IoT Edge デバイスの作成

この演習では、Azure上にデプロイしたVM(Ubuntu LTS 18.04)をAzure IoT Edgeデバイスとして作成し、シミュレーションデータ(温度/湿度)をIoT Hubに送信します。

タスク1:Linux VMのデプロイ

このタスクでは、IoT Edgeデバイスとして動作させる仮想マシン(Ubuntu LTS 18.04)をデプロイします。

- 1. Azure管理ポータル画面のサイドメニューから[リソースグループ]をクリックして、先に作成したリソースグループ(ex. iothandson)を選択します。
- 2. リソースグループの[追加]をクリックします。
- 3. "Ubuntu"で検索した結果から"Ubuntu LTS 18.04"を選択し、[作成]をクリックします。



1. [基本設定の構成]で各種項目を設定します。

OK

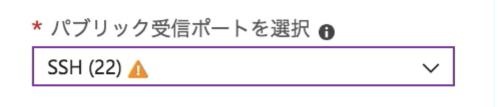
Table 1. 設定項目と設定値

設定項目	設定値
名前	任意のマシン名
VMディスクの種類	HDDまたはSSD
ユーザー名	任意のユーザー名 (例:iotuser)
認証の種類	[パスワード]を選択
パスワード	次の条件を満たす、任意のパスワード (例:!IoTPass1234) *12-72文字 *1つの小文字、1つの大文字、1つの数字および "¥"または"-"以外の1つの特殊文字
Azure Active Directoryでログインする(プレビュー)	[無効]を選択
サブスクリプション	利用するサブスクリプションを選択
リソースグループ	[既存のものを使用]を選択し、先に作成した iothandson を選択
場所	任意の場所を選択

2. [仮想マシンのサイズの選択]でサイズを選択します。

(本ハンズオンでは 8GB 以上のメモリが割り当てられるスペックを選択します)

3. [オプション機能の構成]でパブリック受信ポートを選択で"SSH(22)"を選択します。



4. [概要]で[作成]ボタンをクリックします。

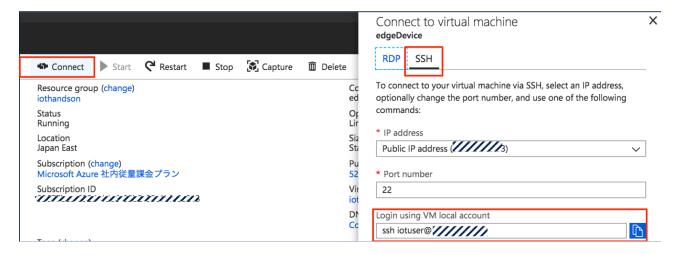
タスク2: コンテナランタイムのインストール

このタスクでは、IoT Edgeのランタイムをインストールします。

Edgeデバイス用にデプロイしたVMにIoT

1. 接続文字列を確認します。

VMのOverviewを開き[CONNECT]をクリックし、右に表示されるダイアログで[SSH]タブを選択します。 Login using VM local accountに記載されている文字列をコピーします。



2. Cloud Shell またはSSHクライアントでVMに接続します。

前の手順でコピーした接続文字列をCloud Shellにペーストしてログインします。

```
ssh iotuser@[IPアドレス]
```

3. root ユーザにスイッチします

```
sudo -i
```

4. パッケージを取得するリポジトリを設定します。

```
curl https://packages.microsoft.com/config/ubuntu/16.04/prod.list > ./microsoft-
prod.list
cp ./microsoft-prod.list /etc/apt/sources.list.d/
curl https://packages.microsoft.com/keys/microsoft.asc | gpg --dearmor >
microsoft.gpg
cp ./microsoft.gpg /etc/apt/trusted.gpg.d/
```

5. コンテナの実行エンジンのMobyをインストールします。

Moby(http://mobyproject.org) は、オープンソース版のDockerの実行環境です。

```
apt-get -y update
apt-get -y install moby-engine
apt-get -y install moby-cli
```

6. Moby が正常にインストールされたことを確認します。

```
docker run hello-world
```

以下のメッセージが表示されれば、mobyが正しくインストールされています。

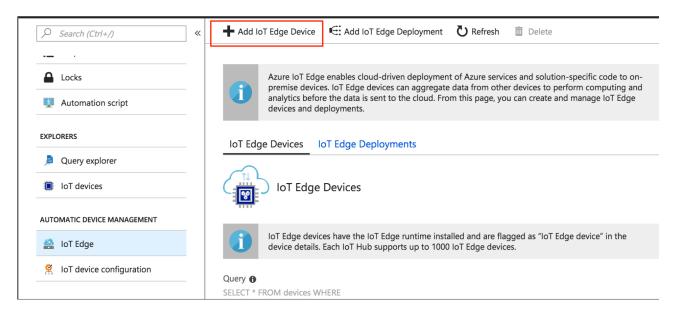
Hello from Docker!

This message shows that your installation appears to be working correctly.

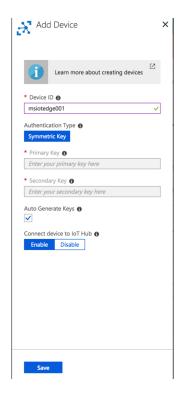
タスク3: IoT Edgeデバイスの追加

このタスクでは、IoT HubにIoT Edgeデバイスを新規登録します。

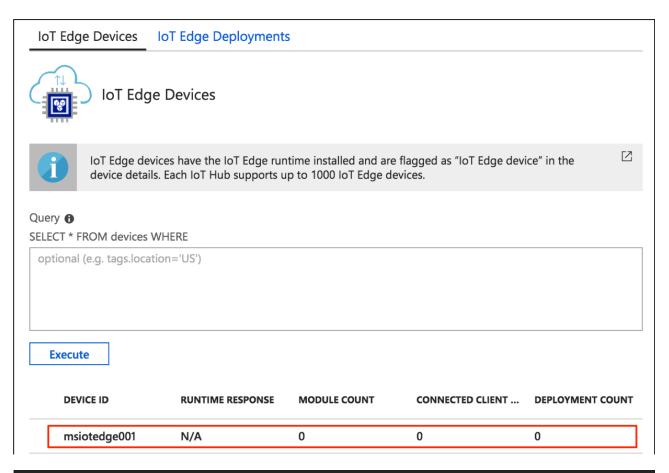
- 1. Azure管理ポータルで、先に作成したIoT Hub iothub-xx を開きます。
- 2. IoT Edgeをクリックして、[+ Add IoT Edge Device]をクリックします。

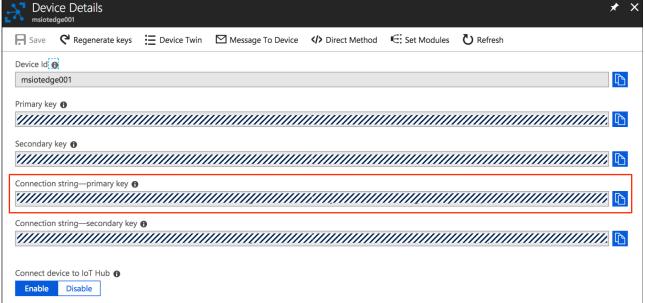


3. Device IDを入力して[Save]ボタンをクリックします



4. IoT Edge Devideを選択して接続文字列をコピーしておきます





タスク4: IoT Edgeランタイムのインストール

このタスクでは、先にデプロイした Ubuntu VM に IoT Edgeランタイムをインストールします。

Ubuntu VMにSSHでログインして、以降のコマンドを順次実行します。

1. SSHでログイン

ssh iotuser@[IPアドレス]

2. rootユーザにスイッチします

```
sudo -i
```

3. IoT Edgeパッケージを取得します

```
apt-get -y install iotedge
```

4. IoT Edgeランタイムを構成します。

/etc/iotedge/config.yaml を編集して、デバイスの接続文字列を設定します。設定文字列の定義は 26行目あたりにあります。

編集前

```
provisioning:
   source: "manual"
   device_connection_string: "<ADD DEVICE CONNECTION STRING HERE>"
```

編集後

```
provisioning:
   source: "manual"
   device_connection_string: "HostName=xxxxx;DeviceId=xxx;SharedAccessKey=xxxxxxxxx"
```

5. IoT Edgeランタイムを開始します

```
systemctl start iotedge
```

6. IoT Edgeランタイムのコンテナが動作していることを確認します

```
systemctl status iotedge
```

7. IoT Edgeランタイムのコンテナログを確認します

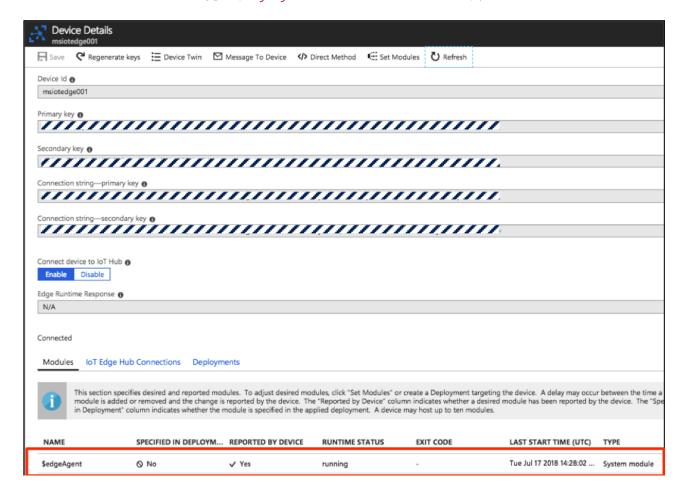
```
docker ps
docker log edgeAgent
```

watch -n 10 docker ps とすると、10秒間隔でdocker psコマンドを実行します。

8. Azure管理ポータルから、対象のIoT Edgeデバイスを開き[最新の情報に更新]をクリックします



9. デプロイされたモジュール一覧に \$edgeAgent が追加されていることを確認します



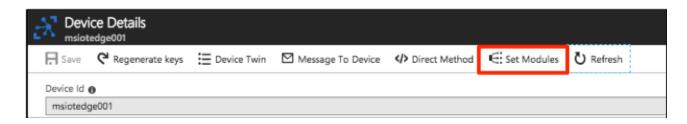
タスク5: **IoT**

Edgeデバイスにシミュレーションモジュールを追加

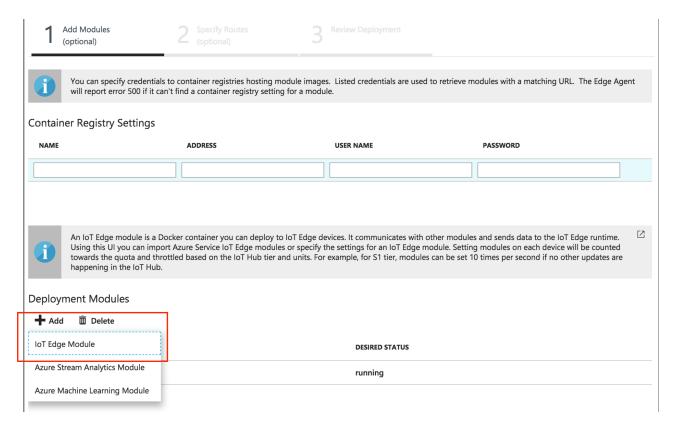
このタスクでは、IoT

Edgeにマイクロソフトが今回するセンサーシミュレーションモジュールを追加します。センサーシミュレーションは、擬似的にテレメトリデータを生成した送信するモジュールです。

1. Azure管理ポータルから、対象のIoT Edgeデバイスを開き[Set Modules]をクリックします



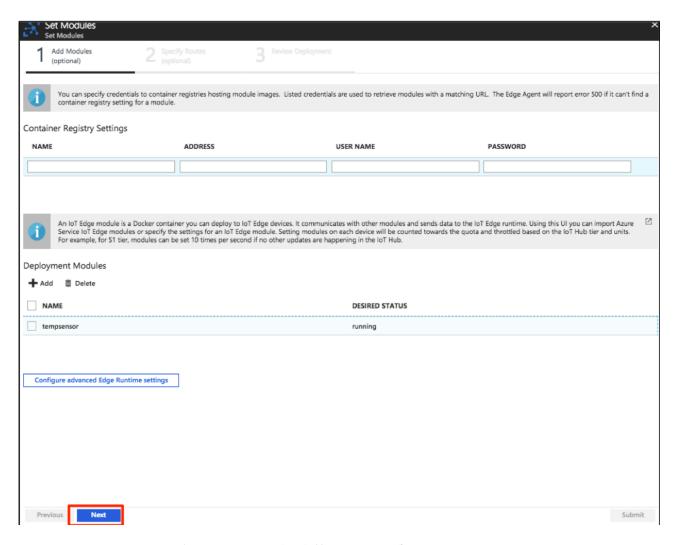
2. Add Modulesの[+追加]-[IoT Edge Module]をクリックします



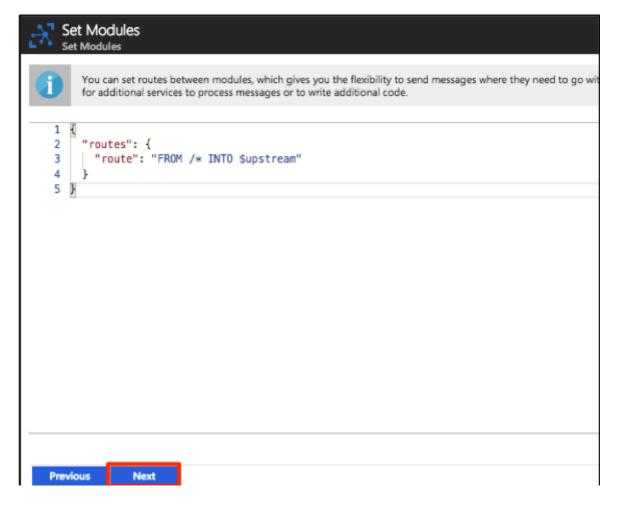
IoT Edge Modulesで項目を入力して[Save(保存)]ボタンをクリックします

設定項目	設定値
名前(name)	tempsensor
Image url	mcr.microsoft.com/azureiotedge-simulated-temperature-sensor:1.0

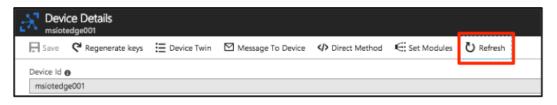
3. [Set Module]の画面に戻るので[Next]をクリックします

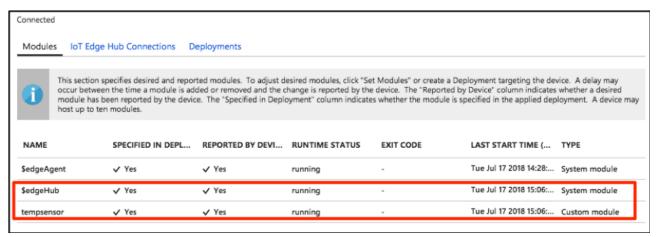


この画面では、メッセージのルーティングを定義します。 デフォルトの ` "route": "FROM /* INTO \$upstream" ` では、全てのモジュールの出力メッセージが \$upstream (IoT Hubを示す予約語)に送信されます。



- 4. 次の画面で[Submit]をクリックします
- 5. [Refresh]をクリックして **\$edgeHub** (IoT Edgeランタイムモジュールの一つ)と `tempsensor` モジュールが追加されていることを確認します





tempsensorはシミュレーションデバイス、edgeHubはEdge Hub(IoT)を示しています

Edgeランタイム

6. IoT EdgeがインストールされたUbuntu VMでDockerコンテナ一覧を確認します。

```
docker ps
```

7. IoT Edgeランタイム(Edge Hub)コンテナのログを確認します

```
docker logs edgeHub
```

8. シミュレーションデバイスコンテナのログから、送信メッセージを確認します。

```
docker logs tempsensor
```

シミュレーションデバイスで生成され、IoT Hubに送信されるデータの例

```
[
    "machine": {
        "temperature": 105.82414784646771,
        "pressure": 10.663510514154549
    },
    "ambient": {
        "temperature": 20.848158501250744,
        "humidity": 25
    },
    "timeCreated": "2017-11-28T09:29:34.4441434Z"
}
```

IoT Hubに送信されたメッセージは、Time Series Insightsなどで確認することができます。

NOTE

IoT EdgeにStream Analytics、Machine Learning、Funcsionsのモジュールを使用する場合は、以下のリンクをご参照くださ(チュートリアルメニューの下に各モジュールの設定手順が掲載されています)

https://docs.microsoft.com/ja-jp/azure/iot-edge/